

こ 案 内

家政学会及び関連団体による講演会、講習会等案内

開催期日	講演会、講習会等開催名（開催地）	主 催 団 体	掲載ページ
1991 年			
3/ 7(木)	飯田紬・水引工芸見学会（飯田）	㊦日本家政学会被服材料学部会	1号, p. 98
3/19(火)	M. Arcus 女史講演会（日本女子大学, 東京）	㊦日本家政学会国際交流委員会	12号, p. 1301
3/28(木) ~29(金)	被服心理学研究分科会研究発表会と一般公開講演会（愛知厚生年金会館, 名古屋）	日本繊維機械学会被服心理学研究分科会	2号, p. 207
4/ 5(金)	日本農学大会平成3年度シンポジウム（東京大学）	日本農学会	2号, p. 207
4/ 5(金)	シンポジウム「絹蛋白質の生産」（日本学術会議講堂, 東京）	日本学術会議蚕糸学研究連絡委員会	2号, p. 208
4/ 6(土)	㊦日本家政学会関東支部講演会（実践女子大学, 日野）	㊦日本家政学会関東支部	1号, p. 97
5/18(土)	第12回日本服飾学会大会（帝国女子大学・短期大学, 守口）	日本服飾学会	1号, p. 98
5/25(土) ~26(日)	㊦日本家政学会第43回大会（実践女子大学, 東京）	㊦日本家政学会	11号, 巻頭
7/17(水) ~20(土)	第6回アジア地区家政学会香港大会（香港）	㊦日本家政学会国際交流委員会	1号, p. 97
7/29(月) ~31(木)	第23回被服材料学夏季セミナー（浅間温泉, 松本）	㊦日本家政学会被服材料学部会	2号, p. 206
7/30(火) ~8/1(木)	平成3年度日本家政学会被服構成学部会総会と第12回夏期セミナー（箱根湯本ホテル）	㊦日本家政学会被服構成学部会	2号, p. 206
9/16(月) ~19(木)	Sixth Asian Congress of Nutrition（マレーシア）		10号, p. 87
10/23(木) ~25(金)	第7回ヒューマン・インタフェース・シンポジウム（京都私学会館）	計測自動制御学会ヒューマン・インタフェース部会	2号, p. 208
10/30(水) ~11/3(日)	アメリカ被服学系大学教授協会年次大会（サンフランシスコ）	ACPTC	10号, p. 87

評

生涯発達学

一人間のプロデューサーとしての個人—

R. M. ラーナー,
N. A. ブッシューロスナーガル 編
上田礼子 訳

岩崎学術出版社, 6, 180 円, 1990 年 4 月発行

訳者は、人間発達 (Human Development) という言葉に、1950 年代の後半、アメリカでふれているが、その言葉には子ども時代ばかりでなく大人の時代の発達も含まれており、最近では生涯発達という言葉も生まれている。

本書は、個人が自己の発達を生み出す者であるという見解のもつ概念的・方法的・経験的な意味を探ることを求めて編集 (全 9 章, 398 頁) されている。一つの理論的観点のもとでまとめているのでは

なく、心理学者、精神科医、ソーシャル・ワーカーなど、発達の専門家による 9 つの論文から構成されている学際的な書物でもある。

個体と環境との関係をどのような視座からとらえるかということに関しては、発達学者の間で種々の異なった見解がある。本書では、生涯を通して可塑性や適応性に富む人間の発達を見すえて、文脈的・相互的 (contextual-interactional) パラダイムを提供している。すなわち、個人と環境との相互作用によって発達が営まれるとしても、それは単に、母子相互作用、親子相互作用、家族との相互作用というだけでなく、家族の外にあるソーシャルネット・ワーク、物理的環境、歴史・文化的背景などを含め、より広範な環境と個体との持続的相互作用によっていると考えられている。発達をとらえるさいに多くの変数を重視する必要があることが理解できる。また、生物学的存在であると同時に社会的存在でもある個体としての人間発達が、人生の各時期において、

個人本人の積極的な寄与によってなりたっていることが全論文を通して認められる。老年期においても、また然りである。

人間発達に興味・関心をもっている者にとって、得られる示唆は大きい。

(大妻女子大学 千羽喜代子)

楽しくできる 被服教材・教具の活用研究

日下部信幸 編著

家政教育社, 2,575 円, 1990 年 12 月発行

著者は科学技術の進歩した現在の社会に生きる子供たちにとって、生活に密着した身近な現象を理解し、実生活に応用できるような基本的能力を伸ばす家庭科教育が必要であると主張している。

そのためには、従来の家庭科教育の被服分野の手法では十分とはいえず、身の回りにある素材を教材として活用し、児童生徒が自分自身の手でもの造りを体験できるように指導法によって興味を喚起していくようにしている。

「言うは易し、行は難し。」というが、この本では表題のようにどのように行えばよいかを中心に、次の 4 章に分けて組み立てられている。4 章の内容は、次のとおりである。

第 1 章 布の成り立ちと布の繊維を調べる教材・教具の活用

第 2 章 繊維から糸・布・作品への一貫性教材・

教具の開発と活用

第 3 章 布の性能を調べる実験教具の開発と活用

第 4 章 石けん作りと石けんの作用を調べる教材・教具の開発と活用

各章は、前述の著者の考え方を実行していく上で必要となる、試料や材料の入手法、実験装置の作り方、指導法などを図や写真を多く使って具体的に詳しく説明してある。著者の永年にわたる創意工夫と研究に基づいて考案した教材・教具の開発と活用法の部分である。

また、現場の教師がこれらの教材・教具を使って小、中、高校、短期大学で実践した結果を各章末に実践研究として載せてある。この中には、学習指導計画、教材・教具の作成の実際、児童生徒の反応、教師側からみた成果と今後の課題などが書かれていて参考になる。

家庭科教育や生活科学の内容が見直され、男女共修が始められている現在、戦育の現場にいて教材や教具、指導法に頭を悩ませている人、教職を志望している学生には一読をすすめたい。また、大学短大の被服関係の教師にも小、中、高校の家庭科教育を考える上で参考になるであろう。

(実践女子大学 城島栄一郎)

食品ハイドロコロイドの科学

西成勝好, 矢野俊正 著

朝倉書店, 5,768 円, 1990 年 10 月発行

食品ハイドロコロイドとは、蛋白質や多糖類などの高分子物質のことである。これらの物質は食品の調理、加工あるいは製造において、それ自体が食品の主成分として役割を果たす場合と、少量の添加で食品の口あたり、歯ごたえ、舌ざわりを改良するテクスチャー・モディファイヤーとしての機能を示す場合とがある。これらの多糖類や蛋白質の研究はきわめて多いが、それらの大部分は対象となる高分子ごとにバラバラにおこなわれているのが現状である。それを食品ハイドロコロイドとして統一的にとらえることにより、別々のコロイド物質に携わる研究者間の情報交換は有効になされるし、基礎・応用両面での発展が期待されると、編者はその序において指摘している。これが本書を貫く考え方であり、まことに当を得たものと共感する。

本書はこのような線に沿って構成され、1. コロイド化学と食品、2. ハイドロゲルと水、および 3. 水溶性高分子溶液の物性というような基礎的な部分の次に、4. ゲル状態、5. 含泡状態、6. エマルジョン状態、および 7. コロイド分散系の安定性について解説し、ハイドロコロイドが食品を形成する際の基本的な状態を統一的にまとめている。そして、個々の食品ハイドロコロイドに固有な特性を、8. 微生物多糖類、9. 植物多糖類、10. 海藻多糖類、11. 澱粉、13. 植物蛋白質、14. 畜肉蛋白質、15. 魚肉蛋白質、16. 卵白蛋白質、および 17. 乳蛋白

質として具体的に解説し、さらにこれらの多糖類や蛋白質と食品工業との関係を 12 および 18 の二章で説明している。ハイドロコロイドが食品の特性に対して最も大きく寄与するのはテクスチャーであることから、19. 調理や感覚特性についても 2 つの章を設けている。そして最後の 21 および 22 章では、ハイドロコロイドの生理機能および添加物としての安全性と規格について触れている。

現実の食生活では、液状食品やビスケット、せんべいなど一部の固形食品を除くほとんどの食品はゲル状態で供される。このような実状を承知の上、編者は、本書を読めば、食品ハイドロコロイド科学はまだ確立したものでないことがわかるであろう。古くから研究されてきた典型的な状態としてのゲル状態、含泡状態、エマルジョン状態において、まだわからないことが非常に多い、と述べている。このような客観的な編集方針こそ、本書が本格的な専門書であることの最も大きな証しであり筆者が本書を推薦する大きな理由の一つでもある。

異種コロイド研究の間をつなぐ本書の役割にふさわしく、各章の執筆者が第一級の研究者であること、各章ごとに引用文献が完備していることは本書の価値をいっそう高いものにしている。ただ、食品に対するハイドロコロイドの主たる役割は、テクスチャーという嗜好特性にあることを各所で指摘しながら、本書の中でそれに対応する箇所は少ない。これは編集を責めるよりは、この分野の研究の現実を端的に示すものとして受けとめられるべきことであろう。家政学の立場から、近來にない優れた成書として本書を推薦する次第である。

(大妻女子大学 青木 宏)